

直方ミニバスケットボールクラブだより

—社会的距離—

「社会的距離」とは、今回の「コロナ対策」で出てきた言葉ですね。これは、「ソーシャルディスタンス」を日本語訳にした言葉です。新たな現象（新型コロナウイルス感染）に対して新たな言葉が生み出されて社会に普及していきます。

今回は、当然子どもたちも学び理解してもらわなければならないことで、学校でも、家庭でも、もちろん直方クラブでも、説明をし、日常の生活行動で生かすように指導しています。

この「社会的距離」、「コロナ対策」としては、「2メートル以上離れましょう」と判で押したような学び方をさせるわけですが、子どもたちは、もっと深いところで学び成長していきます。

「コロナ対策」ということを抜いても人間関係において「社会的距離」を理解していくことは大切です。実は、子どもたちは日々の生活のなかで、意識的にも、無意識的にも、「社会的距離」を学びながら成長しています。それは、それを学ぶことのできる環境に身を置いているからできることです。その際たるものが「学校」であり、「クラブ」もその延長にあります。コロナ禍で自粛生活を余儀なくされた約3か月間は、家にこもるしかなく、子どもたちも、家族以外の人と関係をもつことがきわめて制限された状態でした。そのようななかでは、子どもの成長はいびつになっていきます。人（子ども）は人（子ども）と関係するなかでいろいろなことを学び成長します。子どもの声として「はやく学校に行きたい」という声を久しぶりに多く耳にしました。学校に行き渋る子どもにも多くかかわってきたので、余計にその声に新鮮さを感じました。今回の「コロナ自粛」は、私たちが日々あたり前のように（無意識に）行っていた社会生活の意義に改めて気づかされることになりました。

「学校」は、単に国語、算数、理科、社会など、教科内容だけを学んでいるところではありません。各教科の学習内容以外にも、子どもが社会生活を営むスキルやマナーを学び、自律の力を身につけ、将来的に自立して生きていく力を獲得していきます。子どもに必要な力は総合的なもので、とりわけ小学生段階までは、人間としての土台となる力を培った乳幼児期の子育て・教育のうえに、さらに、社会で生きるための基礎的な力をバランスよく身につけていく時期です。そのためには、日々の生活のなかで、いろいろな子どもたちが、互いに関係し合いながら、学び成長していくことのできる環境を保障してあげることがおとなの重要な役割です。

一人ひとり個性ある子どもたちが、複数が寄れば、「すき・きらい」「合う・合わない」など、いろいろな感情がわきますが、それをどうコントロールして協働して社会生活（学校生活）を営んでいくか、その力を身につけていくことができるのが、「学校」であり、「クラブ」です。

子どもに、“自分（たち）で考え判断し行動する”力を求め続けています。まだ活動再開から約2週間ですが、このわずかな期間のなかにも、それにかなう具体的な場面をみることができます。

〇場をわきまえた行動のとり方

6年生が上手にリードして行動する場面がありました。これまでも6年生が下級生を気にかけて、くつをきれいに置くことやあいさつのことなど、教えてくれていることはよくあつていまし

た。

○私との距離のとり方、コーチとの距離のとり方

私（監督）、コーチ、それぞれに、子どもたちとの関係性（距離感）は違います。子どもたちも手探りで距離を縮めているところです。どこまで縮めていいのか、どう縮めればいいのか、子どもなりに感じ、考え、判断し、行動しています。このプロセスが社会（社会的距離）を学ぶことです。

○自分の行動のとり方

「女子は人数が少ないけ、私が行かんとみんなが練習しにくいけ、おくれてでもいく」。こう言って練習に参加した子の自覚と責任感、判断力と行動力、たのもしいですね。

○自分たち、メンバーどうしの距離のとり方

体験入部中の子がいます。慣れない活動、慣れない関係性のなかで、とまどうこともあり、そのつど、その子の活動が止まってしまうことがあります。子どもたちが上手にかかわり、活動をともにしています。なかなかうまくいかないこともあります。そこを調整しながら、活動を前に進めています。おとなにできないことが子どもにはできることがあります。おとなが介入することで、子どもどうしならできたことがうまくいなくなる場合があります。子どもは、子ども時代に、子どもの世界を生きるなかで、大切な力を育てていきます。おとなが介入することで自己解決の力を削いでしまう場合があります。ただし、見守りつつも、必要に応じて必要なサポートをすることはあります。それが指導者の役割ですね。

○自分（たち）で考えた効果的な練習メニュー

今は、個別練習中心ということもあり、自分の練習メニューは自分で作って活動しています。今の自分の状態を知り、自分にあった練習メニューを自分で考えます。作られたものは、私の方でチェックしながら過不足を補っています。

そんななかで、とても効果的な練習メニューを考えて練習している姿も見られるようになっていきます。個のメニューからペアのメニューに進化させて、二人、三人の組み合わせでゲームの流れのなかにある一場面を切り取ったところを練習しています。

①今の自分を知ること【問題把握】→②どこに問題があるのかを分析・整理すること【課題整理】→③解決（練習）方法を考えること【思考】→④練習すること【実行】→⑤ゲームで試すこと【試行】→⑥成果を確かめること（ふりかえり）【検証】→あらためて課題整理、こうした一連のプロセスを子ども自身が体験しながら学びとっていきます。これからの教育として重要視されている「主体的・対話的で深い学び」＝アクティブ・ラーニングそのものです。

今までもこのようなプロセスで活動をつくってきていますが、今年度は、さらにより鮮明にしていきたいと考えています。「教えないで教える」と言葉的には矛盾したことをこれまでも言ってきましたが、ていねいに言えば、上記のようなことになります。なので、バスケットに詳しい人が、だれでも入ってその技術を教え込むというクラブではなく、子どもたち自らが自分の課題を知り、その解決方法を考え、練習を通して解決していくという主体的な活動のプロセスを大事にしたいクラブということです。

これから・・・さらに「子ども主体」の活動を

わずか2週間ですが、されど貴重な2週間でした。これからの活動をさらに楽しみに思える2週間でした。

これから、子どもたちで切磋琢磨しながら活動を創っていきます。いいことばかりではないと思います。多少、つらいことも、くやしいことも、いやな思いをすることもあふでしょう。しかし、それらすべてが子ども（たち）の成長の栄養素です。現代社会においては、あまりにおとなの介入が早すぎたり、多すぎたりすることで、その栄養素を吸収する機会が少なくなっていると思います。（全く逆のこともあります。子どものことに無関心。これも「ネグレクト」の一つですね。）

おとなだって失敗することはあります。子どもが失敗しないわけはありません。むしろ失敗も経験しておく必要があります。失敗経験のない子どもは、必ずどこかで挫折します。大きくなって挫折感を味わってしまうと、立ち直るのにかなりの時間を要します。子ども時代に、いくつもの失敗をしておくことは大事なことです。そして、そのとき、失敗そのものより大事なことで、それは、そのあとの処置をどうしたか、どうできたか、ということです。それを学んでおくことがとても重要です。

おとなは自分の経験上、子どもの失敗を予見できるときもありますね。「失敗するんじゃないかな」と予見できながら、それを見守っているのがつらいときもありますが、それでもあえて見守っていることがあります。子どもにとっての貴重な学びの機会を奪わないようにしたいからです。案の定失敗したら、その後の処置のしかたにアドバイスの必要性を感じればします。「子ども主体」の活動とか「学び」とは、こうして創造されていきます。なので、時間もかかるし、根気もいります。かかわり方のスキルも必要です。指導者、おとなが一方向的に指示し、その通りにさせる方がよほど効率的で簡単の方法です。しかしそれでは、高いプレー技術は身につくかもしれませんが、将来子どもが社会で生きていくための必要な力は育まれません。「教育」ほど「非効率」に意味のあるものはありません。「教育」を語るときに「効率よく」ということが語られるときは、いったん疑問符をつけて考えてみた方がいいと思います（すべてが否定されるものでもないの）。

チームづくりとしては始まったばかりで、まだ多くのことは、子どもたちに語れていません。これから少しずつタイミングをみて、必要な対話を重ねながらつくっていきます。

そのなかで、一つのクラブに所属することの意味について、先日、次のように話しています。

いったん集団に所属したら、自分がとるすべての行動は、いいこともわるいこともチームに影響する。もちろんわるい影響ではなく、いい影響をあたえてほしい。特に6年生は、その先頭でリードする立場。何か行動をとろうとするときに、自分のことだけを考えるのではなく、下級生のこと、チーム全体のことを考え判断し行動することが求められる。そのことを意識して、これからの直方クラブの活動に自覚と責任をもって取り組んでいこう。

